

和歌山市内遺跡発掘調査概報

— 平成 7 年度 —

茶臼山古墳 第 2 次調査

1 9 9 6

和歌山市教育委員会

序 文

和歌山県の県庁所在地である和歌山市は、和歌山県の北西、紀ノ川の河口部に位置しています。紀伊山地に源を発し、西流して紀伊水道に注ぐ紀ノ川は、河口部に肥沃な和歌山平野を形成しました。和歌山市は、この平野部を主たる市域としており、古代より文化の栄えた場所でもありました。そのため、市内には全国的にも著名な岩橋千塚古墳群や大谷古墳をはじめとし、およそ400カ所にもものぼる遺跡が確認されています。

近年、市域においても宅地造成等に伴う開発が増加してきています。それらの開発に対処するために本年度より国庫補助金、県費補助金を得て、和歌山市内に存在する遺跡の緊急発掘調査事業を行うこととなりました。

本年度の調査対象となったのは、古墳時代中期の茶臼山古墳関連の調査1件でありましたが、墳丘の一部を構成する葺石を検出するなど重要な調査成果を得ることができました。ここに報告する調査概要が、地域の歴史の解明に活用できれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり御指導、御協力を頂きました関係各位の皆様に深く感謝いたします。

平成8年3月31日

和歌山市教育委員会

教育長 坂口 全彦

例 言

- 1 本書は、和歌山市教育委員会が平成7年度国庫補助事業として計画し、財団法人和歌山市文化体育振興事業団に事業の委託を行った埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査費の総額は180万円であり、国1／2、県1／8、市3／8の補助率である。
- 3 本年度の調査対象は下記のとおりである。

事業名	調査地	調査期間	調査面積	担当者
茶臼山古墳第2次調査	和歌山市木ノ本761-2	平成7年10月24日～平成8年3月31日	123m ²	井馬好英

- 4 発掘調査及び報告書刊行に係わる事務局は下記のとおりである。

【和歌山市教育委員会】

教育長 浅井 周英（～平成8年2月26日）
坂口 全彦（平成8年2月27日～）
文化振興課長 志岐 忠一
文化財班長 森田 安信
学芸員 益田 雅司

【財団法人和歌山市文化体育振興事業団】

理事長 筒井 敏郎
事務局長 竹尻 圭吾
総務課長 別院 稔
事務主任 豊田 忠彦（調査庶務担当）
学芸員 井馬 好英（発掘調査担当）

- 5 本書のうち発掘調査の概要部分については井馬好英はじめ財団法人和歌山市文化体育振興事業団学芸員が担当し、本書の構成については益田雅司、前田敬彦（和歌山市教育委員会 学芸員）が協議しておこなった。
- 6 発掘調査及び本書をなすにあたって和歌山県教育委員会及び財団法人和歌山県文化財センター、静岡県磐田市教育委員会、同浜松市博物館諸氏の方々に御教示頂いた。記して感謝の意を表します。

本文目次

1. 調査の契機と経過	(井馬好英)	1
2. 位置と環境	(ク)	2
3. 既往の調査	(栗本美香)	4
4. 調査内容	(井馬)	7
(1) 調査の方法		7
(2) 調査の概要		7
5. 出土遺物		10
(1) 古墳時代の遺物	(ク)	10
(2) 平安～室町時代の遺物	(北野隆亮)	12
(3) ガラス製品	(ク)	13
6. まとめ	(井馬)	13
報告書抄録		16

図版目次

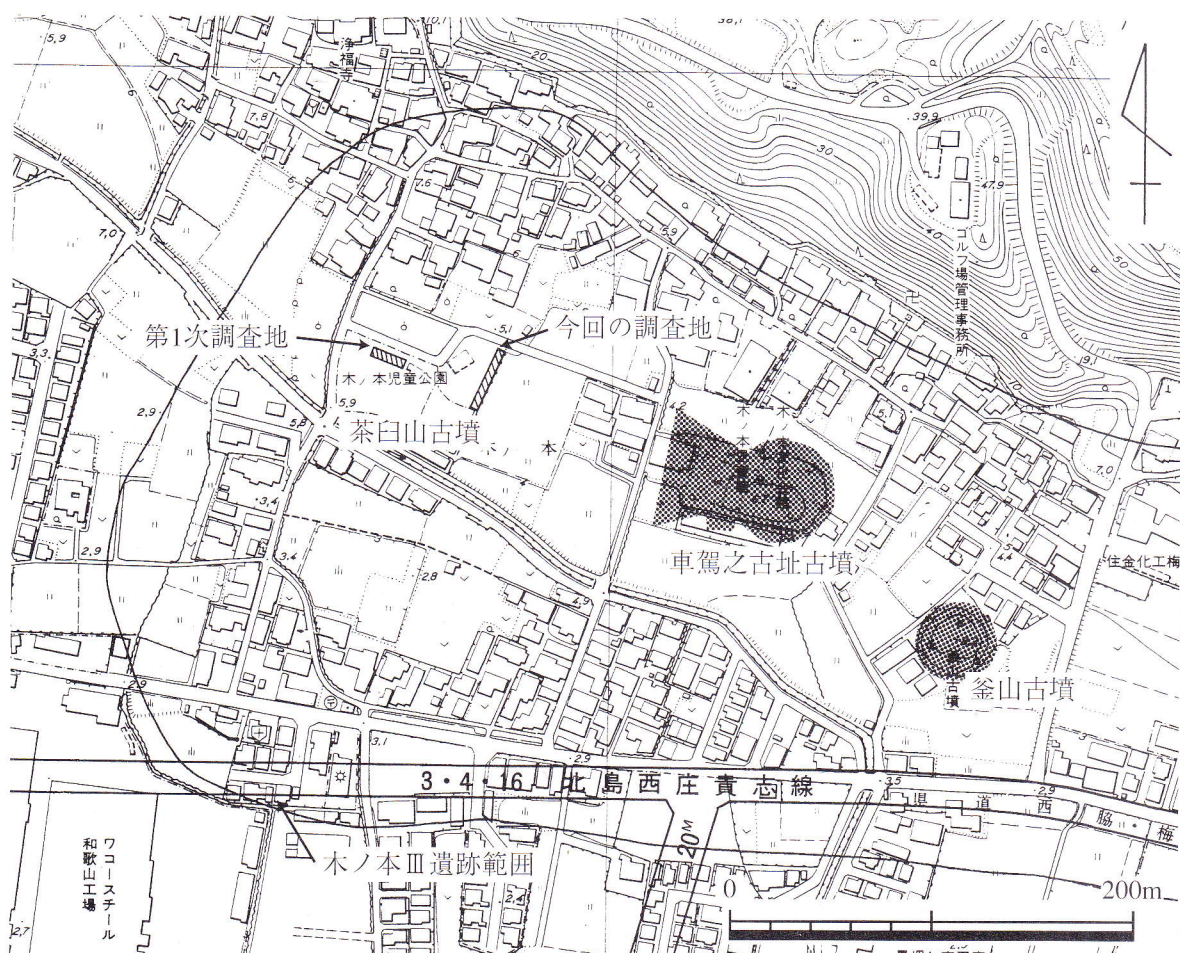
図版1	調査地遠景	調査地周辺空撮(上が北)車駕之古址古墳第2次調査時、調査地遠景(北東から)
図版2	調査地遠景	調査地遠景(東から)、調査前(南から)
図版3	調査区全景	全景(北から)、全景(南から)
図版4	遺構	北側墳丘斜面(北から)、南側墳丘斜面(東から)
図版5	遺構	北側墳丘斜面葺石(北東から)、北側墳丘斜面葺石(真上から)
図版6	遺物出土状況・遺構	北側墳丘斜面遺物出土状況(東から)、北側墳丘裾部杭列(南東から)
図版7	土層	調査地北壁土層堆積状況(南から)、北側墳丘西壁土層堆積状況(東から)
図版8	土層	トレンチ1西壁土層堆積状況(東から)、トレンチ2西壁土層堆積状況(東から)
図版9	土層	トレンチ3南壁土層堆積状況(北から)、トレンチ4西壁土層堆積状況(東から)
図版10	遺物	円筒埴輪
図版11	遺物	円筒埴輪、蓋形埴輪
図版12	遺物	円筒埴輪
図版13	遺物	円筒埴輪
図版14	遺物	須恵器、土師器、中国製白磁、ガラス小玉、木製杭

1. 調査の契機と経過（第1図）

今回の調査は、和歌山市教育委員会が緊急発掘調査事業として国庫補助金を得て実施したものである。調査原因は、和歌山市木ノ本761-2番地において石垣の改修工事が行われることになり、この工事現場が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された周知の遺跡である木ノ本Ⅲ遺跡（遺跡番号42）の範囲内であり、しかも釜山古墳群の中の茶臼山古墳（遺跡番号44-3）の後円部推定地にあたることから、この工事に先立つ発掘調査が必要となった。このため、調査は和歌山市教育委員会の指導のもと財団法人和歌山市文化体育振興事業団が委託を受けて実施した。

調査対象地は、茶臼山古墳の後円部推定地にあたり、東西約4m、南北約29mの方形区画であり、面積123㎡を測る。茶臼山古墳にかかわる調査は、平成5年度に木ノ本児童公園内に水洗浄化槽が設置されることになり、この設置工事に伴う調査が行われている。この調査では、前方部の外堤に樹立されたとみられる埴輪列を確認し、茶臼山古墳の存在をより明確なものにしている。

今回の調査は、まず重機により改修する石垣の排除を行い、こののち作業員による人力掘削を開始した。機械掘削の状況から西側において古墳の墳丘が東側水田面より約1mの高さまで残存していることが確認でき、また調査区の中央部が古墳の後円部にあたることが明らかとなった。このため、墳丘部にあたる調査区中央部に墳丘の内部構造を確認するためのトレンチを4ヶ所設け調査を行った。



第1図 調査位置図

2. 位置と環境（第2図）

和歌山市は、和歌山県の北東端に位置し、北は和泉山脈を境として大阪府泉南郡岬町・阪南市、東は和歌山県那賀郡岩出町・貴志川町、南は海南市に隣接し、西は紀伊水道に面している。本市のほぼ中央を西流する紀ノ川は、奈良県の大台ヶ原に源を発する全長136kmの河川であり、この紀ノ川によって運ばれた土砂によって形成された沖積平野が和歌山平野である。古代における紀ノ川は、海岸線に沿って形成された大規模な砂堆のために現在の延時周辺で大きく屈曲して南流し、史跡和歌山城のある岡山の東を流れていたとされる。また当古墳の存在する木ノ本Ⅲ遺跡は、砂堆背後に残されたラグーン内に形成された沿岸州と考えられている。

次に周辺の遺跡を概観すると、まず旧石器時代ではわずかに西庄遺跡(7)や鳴滝遺跡(23)でナイフ形石器の出土が知られているのみである。

縄文時代では当遺跡周辺の紀ノ川北岸において大谷川遺跡(10)・木ノ本Ⅱ遺跡(3)・六十谷遺跡(31)などが存在する。中でも大谷川遺跡からは後期前半の土器が、また木ノ本Ⅱ遺跡からは晩期後半の突帯文土器が出土している。また紀ノ川南岸では国の史跡に指定されている鳴神貝塚(53)がある。この貝塚は、縄文時代中期から晩期にかけての土器が多数発見されており、近畿地方で最初に発見された貝塚として著名である。

弥生時代になると遺跡の数は増し、平野部に集落が展開するようになる。弥生時代前期に始まる集落では、縄文晩期の突帯文系土器の系譜をひくいわゆる「紀伊形」甕が多数出土する太田・黒田遺跡(44)がよく知られている。また中期から後期にかけての集落跡では、紀ノ川右岸の宇田森遺跡や北田井遺跡があり、円形の竪穴住居跡などの遺構が検出されている。このほか標高100m前後の丘陵上に展開するいわゆる高地性集落として橋谷遺跡や滝ヶ峯遺跡などが知られている。

次に、古墳時代は遺跡の数はさらに増し、弥生時代に続き平野部に集落が営まれている。平野部の集落跡は、紀ノ川北岸の田屋遺跡(39)において多数の竪穴住居跡が検出され、また南岸では鳴神遺跡群に集中している。また丘陵部に営まれた集落跡は、近年において財団法人和歌山市文化体育振興事業団が調査を行った府中Ⅳ遺跡(38)や平尾遺跡が存在する。また鳴滝遺跡(23)で発見された古墳時代中期の大規模な倉庫群は、全国的にもよく知られているものである。

また、この時代に構築された古墳は、まず平野部で秋月遺跡(47)やその周辺の遺跡で確認されている古墳時代前期のものが存在する。中期になると紀ノ川南岸では山間部に構築された花山古墳群(52)などが存在し、また北岸では平野部に構築された釜山古墳群と山間部に構築された大谷古墳(20)などがみられる。特に、六十谷古墳群(36)では県下最古級の埴輪が出土している六十谷2号墳(全長約27mの前方後円墳)がある。こののち、古墳時代後期にかけて山麓には岩橋千塚古墳群(54)に代表される大規模な古墳群が形成される。

釜山古墳群には、これまで3基の古墳が確認されている(第1図)。まず釜山古墳は、最も東に位置する円墳で径約40m、高さ約7mの墳丘をもつ。古墳の主体部等の明確な調査は行われていないが、近辺の調査では多数の埴輪片が出土し、またガラス小玉等の副葬品の出土も知られている。

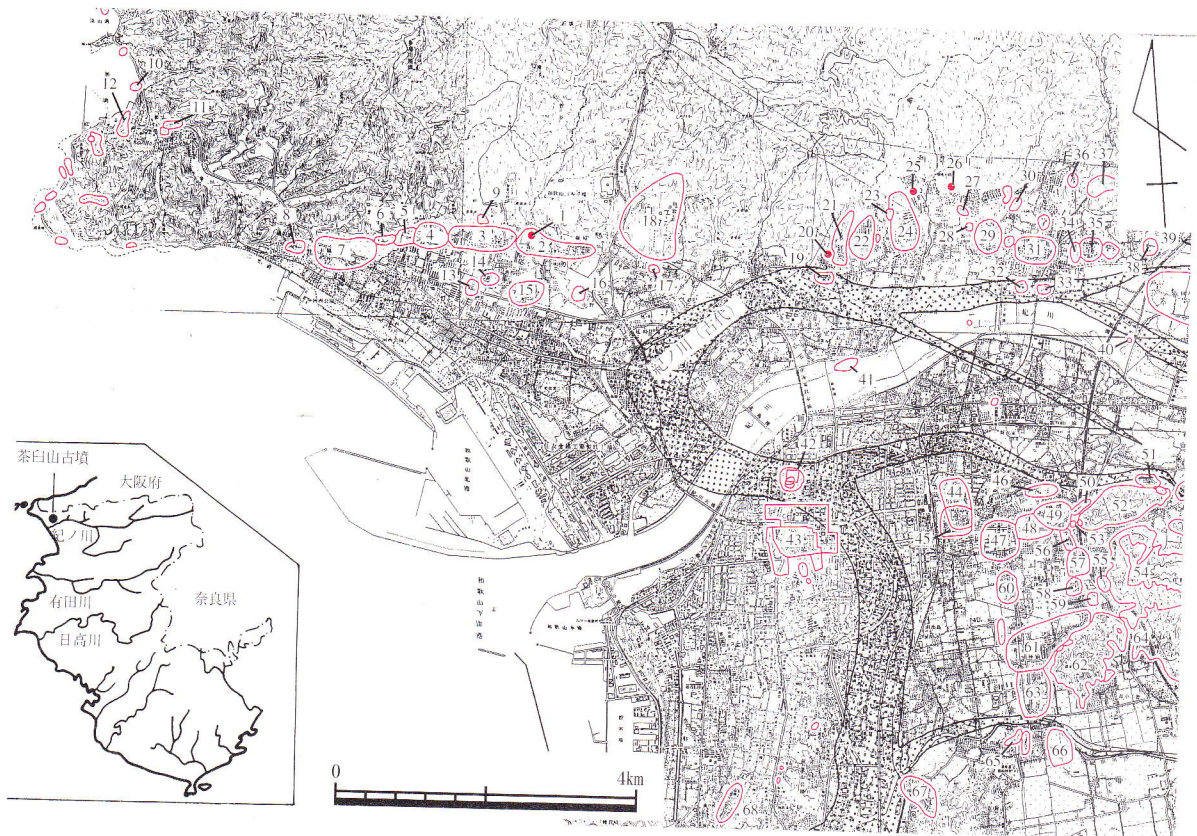
次に、釜山古墳の北西約100mに位置する車駕之古址古墳は、これまで5次にわたる発掘調査が実施され、墳形や規模を明確にしている。この古墳は、前方部を西に向けた前方後円墳で、南側のみに造り出しをもつものである。また規模は、全長約86m、後円部直径約51m、くびれ部幅約33m、前方部幅

約62m、前方部長約41m、後円部の高さ4.0m以上とされる。また周濠及び外堤を含めた規模では、推定全長約120mにも及ぶことが確認されている。遺物では多量の埴輪片に混ざり、1,000点にも及ぶガラス小玉が出土し、中でも特筆すべきは後円部から出土した金製勾玉である。

このほか、木ノ本Ⅲ遺跡の発掘調査はこれまで9次にかけて実施されており、古墳時代から中・近世に至る遺構、遺物を検出している。

【参考文献】

- 和歌山県史編さん委員会 『和歌山県史』 和歌山県 考古資料 1983
 和歌山市史編さん委員会 『和歌山市史』第1巻 和歌山市 1991
 日下雅義 「紀ノ川の河道と海岸線の変化」『歴史時代の地形環境』 1980
 額田雅裕 「和歌山市木ノ本付近における微地形と遺跡の立地」『和歌山市立博物館研究紀要』5 1990
 『六十谷古墳群発掘調査報告書』 和歌山市教育委員会 1991



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	茶臼山古墳	古墳	18	高芝遺跡		35	直川庵寺跡	奈良～平安	52	花山古墳群	古墳
2	木ノ本Ⅲ遺跡		19	桶見遺跡	先土器・古墳	36	六十谷古墳群	古墳	53	鳴神貝塚	縄文～弥生
3	木ノ本Ⅱ遺跡		20	大谷古墳	古墳	37	北山古墳群	古墳	54	岩橋千塚古墳群	古墳
4	木ノ本Ⅰ遺跡		21	鱈山古墳群	古墳	38	府中Ⅳ古墳群	弥生～古墳	55	大日山Ⅰ遺跡	古墳～奈良
5	西庄Ⅱ遺跡		22	雨が谷古墳群	古墳	39	田屋遺跡	弥生～古墳	56	鳴神Ⅲ遺跡	
6	平の下遺跡		23	鳴滝遺跡	古墳	40	紀ノ川銅鐸出土地	弥生	57	鳴神Ⅱ遺跡	弥生～平安
7	西庄遺跡	古墳～平安	24	鳴滝古墳群	古墳	41	岡有本遺跡	弥生～古墳	58	井辺Ⅱ遺跡	弥生～古墳
8	磯脇遺跡	中世	25	奥出古墳	古墳	42	鷺ノ森遺跡	弥生～江戸	59	井辺Ⅰ遺跡	弥生～古墳
9	城山遺跡	安土・桃山	26	園部Ⅰ山古墳	古墳	43	史跡和歌山城	江戸	60	津秦遺跡	弥生
10	大谷川遺跡	縄文・弥生(中期～後期)	27	園部Ⅰ遺跡		44	太田・黒田遺跡	弥生～奈良	61	井辺遺跡	弥生
11	加太駅北方遺跡	弥生～奈良	28	園部Ⅱ遺跡		45	太田城跡	安土・桃山	62	井辺前山古墳群	古墳
12	加太遺跡	縄文～中世	29	有功遺跡		46	鳴神Ⅵ遺跡	古墳	63	神前遺跡	弥生
13	木本小学校Ⅰ遺跡	古墳	30	大同寺遺跡		47	秋月遺跡	弥生～奈良	64	寺内古墳群	古墳
14	木本小学校Ⅱ遺跡	古墳	31	六十谷遺跡	縄文～弥生	48	鳴神Ⅴ遺跡	弥生～平安	65	和田遺跡	弥生
15	榎原遺跡	古墳	32	和田遺跡	弥生～古墳	49	鳴神Ⅳ遺跡		66	和田遺跡	弥生
16	中野遺跡	古墳	33	川口遺跡	弥生～古墳	50	音浦遺跡	古墳	67	三田古墳群	古墳
17	栄谷貝塚		34	直川遺跡	縄文	51	栗栖Ⅰ遺跡	古墳	68	関戸遺跡	弥生～室町

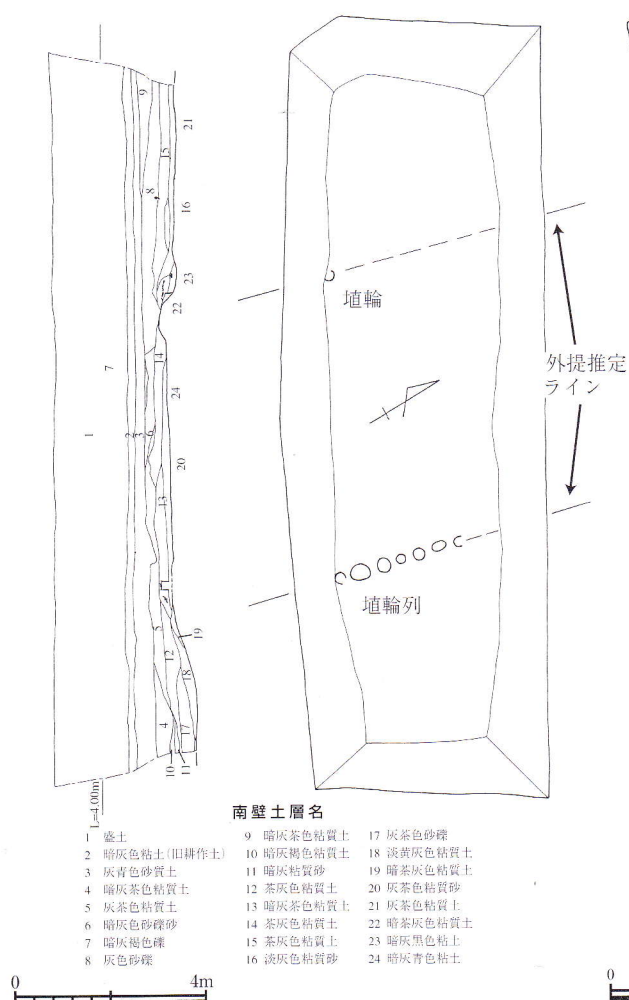
第2図 茶臼山古墳周辺の遺跡分布図 (古代の紀ノ川の流路は、日下雅義氏文献等による。)

3. 既往の調査

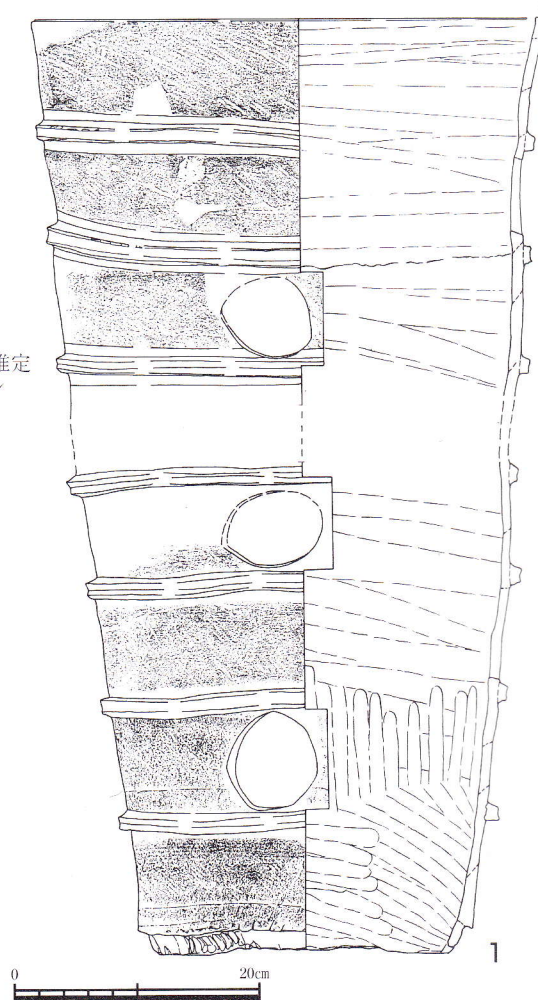
第1次調査は、茶臼山古墳の推定地の一部である木ノ本児童公園内において水洗浄化槽が設置されることになり、それに先立ち行ったものである。調査は、平成5(1993)年11月から12月にかけて実施したものである。また調査面積は94㎡である。ここでは、外堤とみられる堤状の地形およびその頂上部両端で円筒埴輪列を検出している。

外堤とみられる堤状の高まりは調査区の中央で検出したものであり、磁北よりN-13°-Eの方向性をもって南北にのびる。その頂上部平坦面の東端で円筒埴輪が7本樹立した状態で出土し、また西端においては1個体のみであるが樹立した状態で検出されている。このため、堤の両端に平行して埴輪列が存在していたものと考えられる。円筒埴輪列は、表土および中世の遺物包含層を掘削した後、標高2.6mのところ検出されている。埴輪のほとんどは、後世の削平により上部が欠損した状況であった。また底部は、ベース層である暗茶灰色粘質土層内に基底部が据えられていた(第3図)。

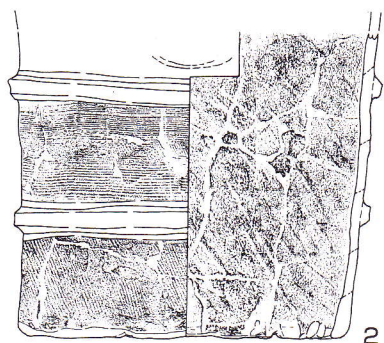
出土遺物は、その大半が埴輪である。埴輪には、円筒埴輪、朝顔形埴輪、蓋形埴輪が出土しているが、代表されるものに樹立された状態で検出された円筒埴輪8個体(第4・5図)がある。また、そのほか中世の土師器、須恵器、瓦器などが微量出土している。



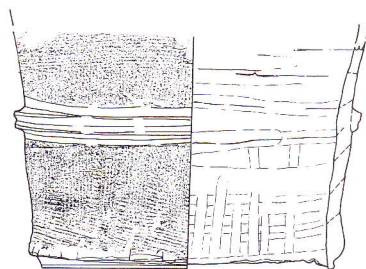
第3図 第1次調査遺構平面図及び南壁土層断面図



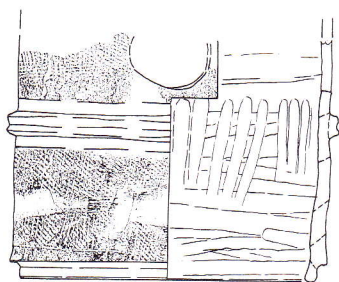
第4図 遺物実測図1



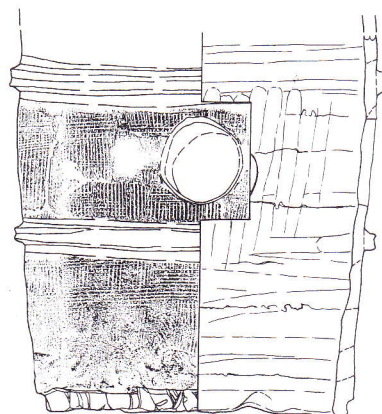
2



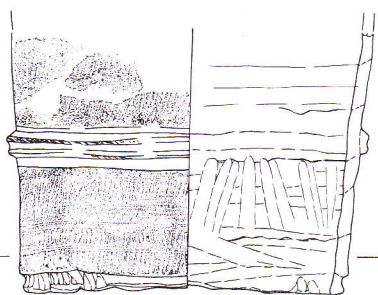
5



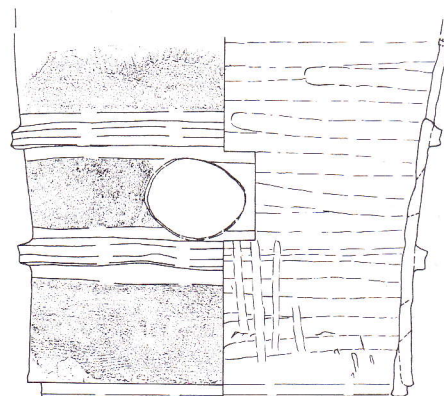
3



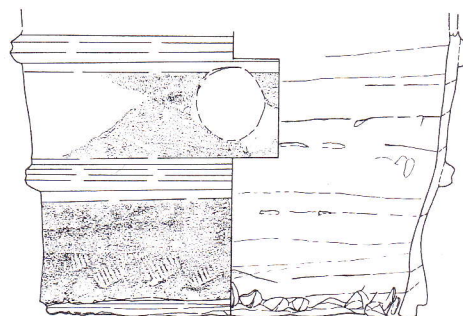
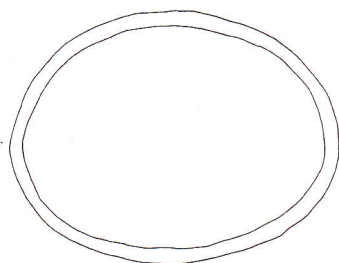
6



4



7



8



第5図 遺物実測図2

円筒埴輪には、暗灰色で硬質な須恵質のもの(1・3～5)と、黄褐色もしくは淡赤褐色を呈する土師質のもの(6・8)、淡灰黄色で半須恵質のもの(2・7)がある。前述の如く、ほとんどのものが底部から2、3段までしか残されていないが、復元すると近接する車駕之古址古墳において出土したものと同様4突帯5段の円筒埴輪になるとみられる。しかし、推定復元すると大型の7突帯8段となるもの(1)が1点出土している。この大型円筒埴輪は、口縁部径43.8cm、底部径24.5cm、推定復元器高79.8cmを測る。1以外の埴輪は、底部径が直径25～32cmである。器壁の厚さは、底部付近を除いて0.6～1.2cmを測る。また埴輪を上方から見た場合、その平面形がほぼ円形を成すものが大半であるが、(4)については短径20.7cm、長径27.0cmの楕円形を呈する。タガは全て断面形が「M」字形を呈し、粘土紐貼り付けによるものである。また(1)のタガについては側面に粘土を充てんした痕跡がみられる。底部については(2)を除く全てのものに「淡輪技法」を用いており、内側に屈曲して段をもつ。

外面調整は、1次調整がタテハケのちタタキで、タガ貼り付けの後の2次調整にはC種ヨコハケを施すものが主体を成す。そのほかのものとしては、1次調整のタテハケ以前にタタキ技法を用いるもの(4・5)やタタキのち板ナデを用いるもの(1)もある。2次調整は、最下段のみヨコハケの代わりにヨコナデを用いるもの(5)がある。特に(2)については、1段目の1次調整にナナメハケを施した後2次調整を省略し、2～3段目の2次調整にはB種ヨコハケを施している。底部に「淡輪技法」を使用していないことなど、他のものとやや様相を異にする。内面調整については、丁寧なヨコナデによって調整した後、底部付近をタテおよびナナメ方向の指ナデによって調整しているのが特徴的である。また、なかにはヨコナデ以前にタテハケを施した痕跡がみられるもの(5)もある。

このほか特記すべきものとして、ヘラ描きの記号をもつ円筒埴輪の口縁部が出土している(図版11a)。記号は、ハの字形に2本を1対とした綾杉文風のものであり、斜め方向に2対確認できる。この口縁部片は焼成および出土位置からみて、(7)に接合する可能性がある。

外堤上で配列されていた順序としては、北から(3)→(4)→(6)→(2)→(1)→(7)→(5)であり、須恵質→須恵質→半須恵質→半須恵質→須恵質→土師質→須恵質となる。また外堤の西端で出土した埴輪は、土師質である。

次に、形象埴輪は蓋形埴輪の軸部が1点出土している(図版11b)。この埴輪は土師質焼成であり、復元径6.5cmを測る。また口縁部には断面形が台形を呈する突帯がつくタイプのものである。

【参考文献】

- 同志社大学考古学研究室・和歌山市教育委員会 『木ノ本釜山(木ノ本Ⅲ) 遺跡発掘調査報告書』 1989
川西宏幸 「円筒埴輪総論」 『考古学雑誌』 64-2 1978

4. 調査内容

(1) 調査の方法

調査の方法は、調査原因が石垣の改修であるため、まず既存する石垣を重機により排除し、下層の調査を人力により行った。また当地が古墳の墳丘とみられたことより墳丘の内部構造を確認するためのトレンチを4カ所設定し、調査を行った。

出土遺物の取り上げは、調査区実測の割り付けをもとに4mメッシュの間隔で行った。また表土及び墳丘裾部の堆積土を地区ごとに土のう袋に収納し、1mmメッシュのふるいによる水洗洗浄を行った。この結果、ガラス玉をわずか1点であるが発見することができた。

土層の色調及び土質の観察については、従来通有の呼称と農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』1994年版を併用した。

次に図面による記録は、任意の仮原点(0.0)を調査区の北側に設け、調査区に添った方向を基準に設定した。このため基準となるライン(仮N)は、磁北より約30°東に振っている。平面図及び土層堆積状況図はすべて手実測で行い、基本的に1/20の縮尺で実測図を作成したが、葺石等の特殊遺構については1/10の縮尺を用いた。また遺跡の水準は、国家水準点を基準として記録した。

(2) 調査の概要(第6～8図)

当調査地の基本層序は大半が古墳の墳丘部にあたるため、ほとんどが削平を受けた墳頂部上に堆積した約10cmの厚みをもつ表土(暗茶色砂)のみが堆積土である。しかし、墳丘斜面にあたる南北両端では墳丘の傾斜に沿った堆積がみられた。

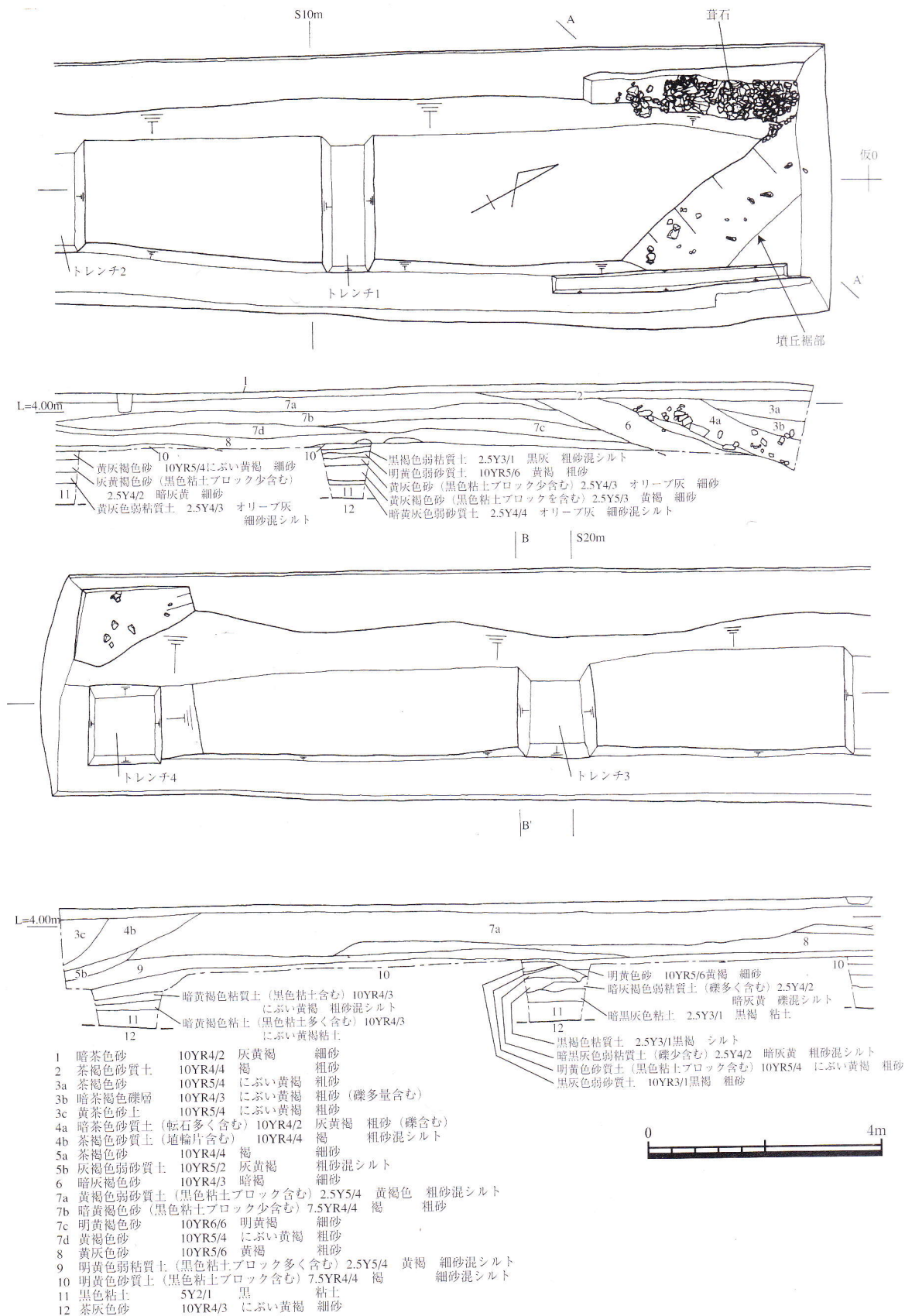
まず比較的堆積状況が良好な北側の墳丘斜面の堆積は、3a層及び3b層に近世の肥前陶磁が若干量出土し、さらに下層の4a層から葺石の転石に混ざり埴輪片が出土している。しかし、この層を含め周濠の最下層まで輸入陶磁器や瓦器等の中世遺物が出土している。その下層には、葺石を構築した際の堆積層とみられる5a層(茶褐色砂)と墳丘構築時の堆積層とみられる6層(暗灰褐色砂)が墳丘に沿った傾斜をもって堆積している。

南側の墳丘斜面の堆積層は、北側の4a層に対応するとみられる4b層(茶褐色砂質土)がある。この層は、北側に比べ葺石の遺存が極めて少なく、おそらく本来的に存在した葺石のほとんどが下の周濠内に転落したものとみられる。また4b層の下層には、上層と酷似するが埴輪片を含む5b層が堆積している。

次に墳丘の構成土は、まず標高約2.2m前後に堆積したベース土とみられる12層(茶灰色砂)の直上に30cm前後の厚みをもつ11層(黒色粘土)が堆積している。この粘土層は、1～4トレンチすべてに確認でき、また北側の周濠によって途切れている。この状況からおそらく古墳の墳丘内部のみにこの粘土層が全面に堆積しているものとみられる。また11層から上部の7a層までは、粘土質の土層と砂質の土層が互層になり、比較的下層の方が粘質が強く、黒色粘土ブロックも下層に多く含まれる状況が確認できた。これらの墳丘内部の堆積土から遺物は全く出土していない。

今回の調査で確認した墳丘の状況は、後円部の緩やかなカーブと北側の一部において遺存状態の良い葺石と周濠を検出している。また南側では墳丘斜面を検出し、調査範囲の中に限られるが後円部の規模を明確にしている。

この状況から残存する墳頂の高さは標高約4.2m、北側における周濠の底面からの残存後円高1.7mを測る。また周濠の底面は、標高約2.5mである。



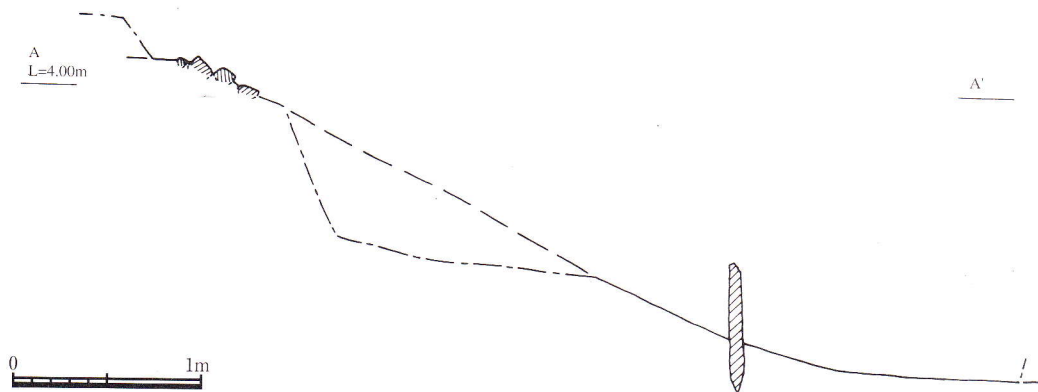
第6図 遺構平面図及び西壁土層断面図

次に、北側墳丘裾部及び南側墳丘斜面の後円部のカーブから後円部の大きさを復元すると、削平を受けた後円頂部で直径推定29m、基底部の後円径推定36mを測る。また周濠幅は明確にはできなかったが、少なくとも基底部で幅1m以上であるとみられる。

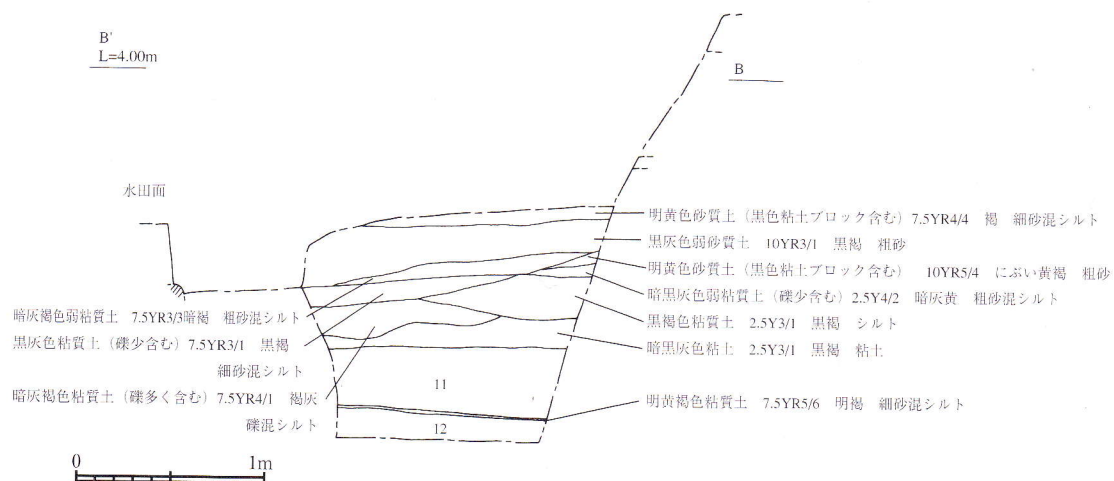
墳丘斜面の傾斜は、南北両端の立ち上がりから両者とも約 27° の角度を測る。また、この斜面に積み上げられた葺石は、北側の斜面でのみ良好な出土をみたが、南側では剥落したものかわずかに残存するのみである。葺石の石材は、ほとんどが10cm～20cm大の和泉砂岩を用いて積み上げている。この和泉砂岩には丸みをもつ自然石と割石の両者がみられ、なかには40cm大のものも含まれており、これらが区画列石になる可能性がある。また砂岩以外では、若干の緑色片岩も含まれている。

北側墳丘裾部には周濠に沿う方向性をもつ杭列が確認できた。この杭列は、径10cm前後の自然木を用いたもので、表皮より松材であることがわかる。また杭先は鋭く面取りがなされている(図版14a・b)。この杭列は、検出状況から周濠の最下層より上部から打ち込まれたものであるため少なくとも中世もしくはそれ以降のものとみられる。

この状況から周濠は、少なくとも中世まで存在していたことが窺え、打ち込まれた杭列などから灌漑などの役割を果たしていたものと考えられる。



第7図 北側墳丘断面図



第8図 トレンチ3南壁土層断面図

5. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、中央部が削平を受けた古墳の墳丘部に位置するため全体的に希薄であり、このためほとんどが南北両端の墳丘斜面の堆積土から出土したものである。特に、北側の周濠周辺の堆積土から良好な遺物が認められ、この古墳に樹立していたとみられる多くの埴輪片や中・近世に至る遺物が出土している。

まず古墳時代の遺物では、埴輪片がほとんどであり円筒埴輪が多くを占め、若干の朝顔形埴輪の破片も含まれている。しかし、形象埴輪は今回の調査では出土していない。埴輪以外では、若干の須恵器片や土師器が含まれている。また北側墳丘斜面の堆積土からガラス玉一点が出土している。古墳時代以外の遺物では、黒色土器や輸入陶磁器（白磁・青磁）、瓦器、土師器皿、羽釜、瓦、肥前系陶磁器、炮烙、泥面子などが出土している。

本書では、これらの遺物の中から代表的なものを古墳時代の遺物と平安～室町時代の遺物に分け記述し、さらに副葬品とみられるガラス玉を最後に記述する。

(1) 古墳時代の遺物（第9図）

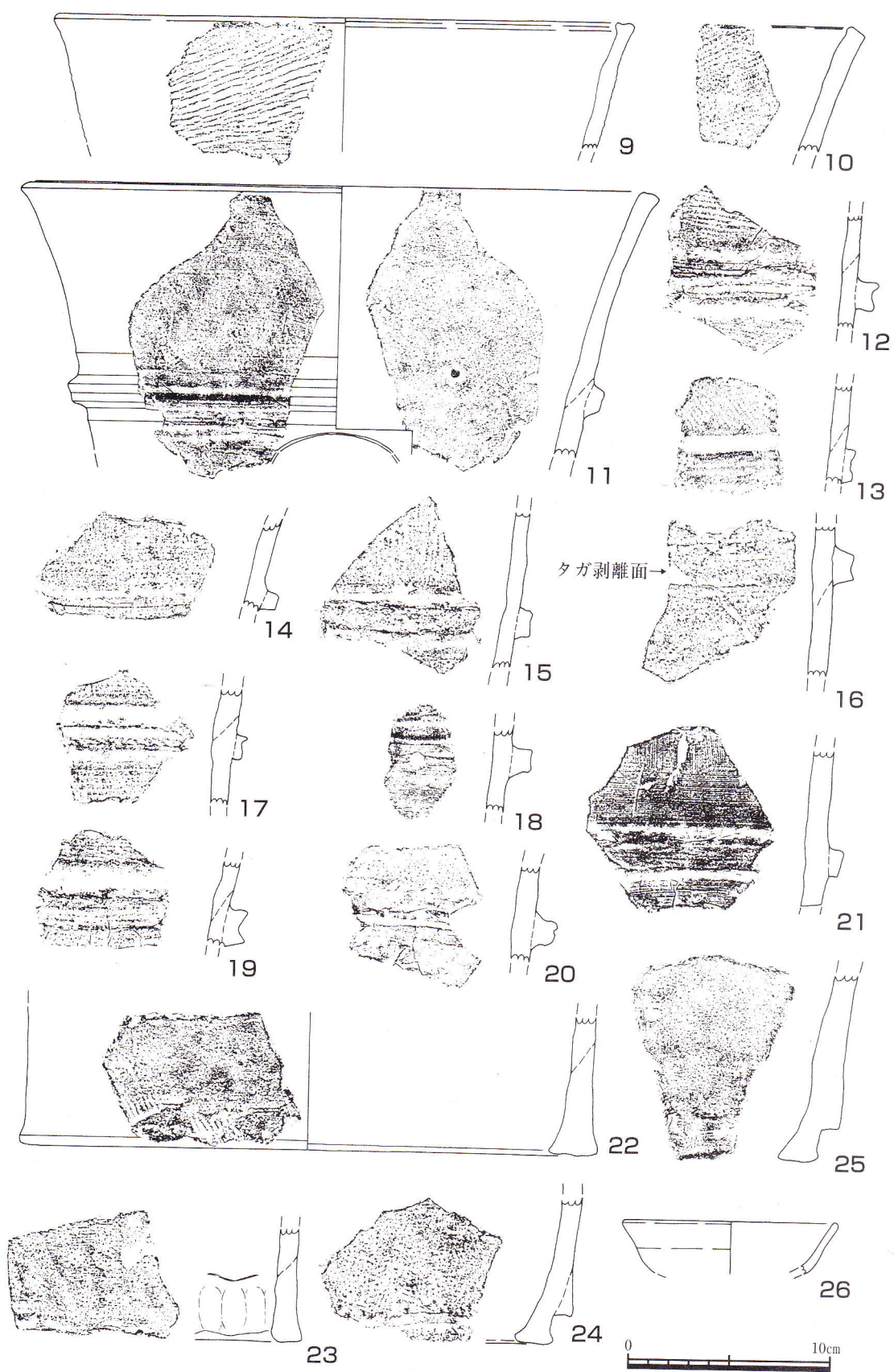
今回の調査で出土した埴輪は、細片ばかりであり全体を復元できるものは出土していない。しかし、わずかに口径を復元できるものが数点出土している。またこれらの円筒埴輪には、灰色の色調を呈する硬質な須恵質埴輪、黄褐色の色調を呈する軟質な土師質埴輪とその中間的な焼成であり、赤褐色の色調をもつ半須恵質埴輪が存在する。

まず口縁部は、復元口径29.8cmのもの(9)と31.8cmのもの(11)が確認できた。口縁部の外面調整は、まず明確なタタキ調整を残すもの(9)やタタキ調整を施したのちに弱いヨコナデによって軽くナデ消しているもの(10)がある。これらの内面調整は、ヨコナデによって仕上げられている。また11は、外面を比較的細かいヨコハケによって仕上げたものである。この円筒埴輪の内面調整は、同じ単位をもつタテハケが行われ、口縁部周辺のみヨコハケが用いられている。

また体部では、まずタタキ調整が明瞭に残るもの(12・13)がある。これらの状況からタタキ→タガという順序が窺え、またタタキの方向性が右上がりのもの(9・10)と左上がりのもの(13)と両者の重なりがみられるもの(12)が存在することがわかる。

ハケ調整のものでは、まず条線密度が3～5本/cmと比較的粗いものがある。なかでもタテハケのみのもの(15・20)、タテハケ→ヨコハケのもの(14・17)がある。これらの状況からタテハケ→(タガ)→ヨコナデやタテハケ→(タガ)→ヨコハケの順序が確認できる。また条線密度が10本/cm前後と比較的細かいハケが施されたものでは、タガを張り付けたのちにヨコハケを施し、透かし孔をあけ、さらにタテハケを施したもの(21)がある。また18は、同じく細かいハケ調整を施したものであるが、B種ヨコハケの可能性が残るものである。16は、外面に自然釉が付着しているものでヨコナデのみによって調整されている。これらの内面調整は、ほとんどがヨコナデによって調整されているが、なかには上方にナデ上げているもの(16)がある。

次に、タガの形状は、断面が台形状を成すもの(11・14・15・18・21)や「M」字状を呈するもの(12・13・16・19)がある。タガの高さは、1.0cm程度のもが多くを占めているが、比較的高いものでは1.4cmを測るもの(19)やまた低いものとして0.6cmのもの(13)がある。またタガの幅では下底幅1.7～2.2cm、上底幅1.3～1.6cmを測るものが多くを数えるが、極端に幅が狭いものとして下底幅1.1cm、上



第9図 遺物実測図3

底幅0.8cmを測るもの(14)がある。また、特殊なものとしてタガの上端面下方にタタキを施したもの(17)や上端面に沈線を一条施したもの(20)がある。

次に底部の形状は、いわゆる「淡輪技法」を用いたもの(24・25)と用いないもの(22・23)の二種がある。まず淡輪技法を用いた底部は、底部外面に大きく段をなすもので、つるなどの繊維で輪を作り、その上に粘土を積み上げて作成したとされるもので、今回出土した底部にも繊維質の圧痕が顕著にみられる。これらの外面調整は、タタキ→タテハケのもの(24)や剥離のため不明瞭ではあるがヨコハケがみられるもの(25)がある。また内面調整は、底部付近に強い指頭による圧痕がみられ、上方を斜めにナデ上げている。淡輪技法以外の底部では、復元径30.4cmを測るもの(22)がある。この底部は、外面調整にタタキ調整を施したのち一部を残し丁寧にナデ消しているものである。23は、9本/cmのヨコハケを施したのち一部をナデ上げによって消している。これらの底面にも繊維状の圧痕が顕著に残る。

次に、埴輪の胎土は、比較的緻密なものと約1mm大の砂粒を多く含むものがある。砂粒には、石英や長石があり、須恵質のものには黒色砂粒が、土師質のものには赤色砂粒が目立つ。埴輪の焼成は、須恵質(10・14・16・21・22・24)、半須恵質(9・11・12・15・19)、土師質(13・17・18・20・23・25)に分けられる。

26は、須恵器の無蓋高杯の杯部とみられるもので、口縁部の復元径11.0cmを測る。

(2) 平安～室町時代の遺物

墳丘の裾部に堆積した遺物包含層から平安～室町時代の遺物が出土した(第10図)。遺物は、黒色土器碗、瓦器碗、土師器羽釜・皿、東播系須恵器こね鉢、常滑焼甕、中国製白磁碗・青磁碗などがある。

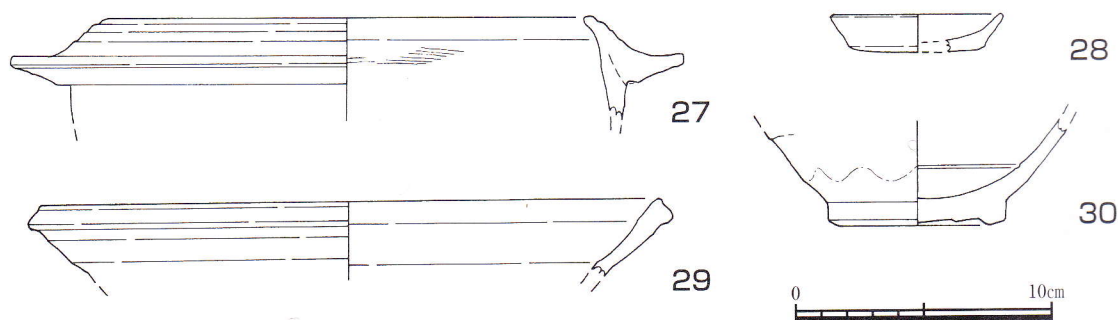
土師器羽釜(27)は復元口径20.0cm、鏝径27.7cm、残存高4.3cmを測る。口縁部外側面にヨコナデにより段を3段つくり、鏝はやや上部に反り気味である。内面には横方向のハケメがみられる。色調は赤茶褐色を呈し、胎土は緻密である。

土師器皿(28)は復元口径7.0cm、復元底径5.6cm、器高1.5cmを測る。ヨコナデにより、口縁部をつくるものである。淡茶褐色を呈し、小形のものである。

東播系須恵器こね鉢(29)は復元口径26.2cm、残存高3.1cmを測る。色調は、体部は青灰色で、口縁端部のみ黒灰色を呈する。胎土中には黒色・白色の砂粒が少量みられる。

中国製白磁碗(30)は高台径7.2cm、残存高4.3cmを測る。内面体部中位に沈線による圏線がめぐる。釉は内面全面から外面上半部まで施され、施釉部には貫入がはいる。高台は厚く削り出されており、高台外側面にはカンナ痕を顕著に残す。太宰府分類の白磁Ⅳ類に相当し、口縁部は玉縁となるものである。

細片のため図化できなかったが、中国製青磁碗が1点出土している。これは竜泉窯系とみられ、口縁

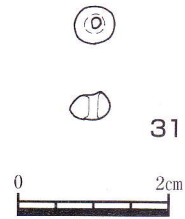


第10図 遺物実測図4

部外側面に片切彫りによる雷文帯の文様をもつものである。その他には黒色土器碗、瓦器碗などがみられる。

(3) ガラス製品 (第 11 図)

ガラス小玉 (31) が 1 点出土した。直径 0.55 cm、厚さ 0.40 cm、孔径 0.15 cm を測る。不純物をガラス内に含むため半透明であり、灰味を帯びた白色を呈する。



第 11 図 遺物実測図 5

6. ま と め

茶臼山古墳は、地形図や航空写真から以前より古墳の存在が知られ、埴輪片も採集されていた。推定された古墳の墳形は、前方部を西に向けた前方後円墳であった。平成 5 年度に行った木ノ本児童公園内の浄化槽設置に伴う調査地は、茶臼山古墳の前方部推定地点であり、この調査より前方部の外堤に樹立されたとみられる埴輪列が検出されている。この成果より前方部における外堤の方向が明らかとなり、本古墳が前方後円墳である可能性が強まった。

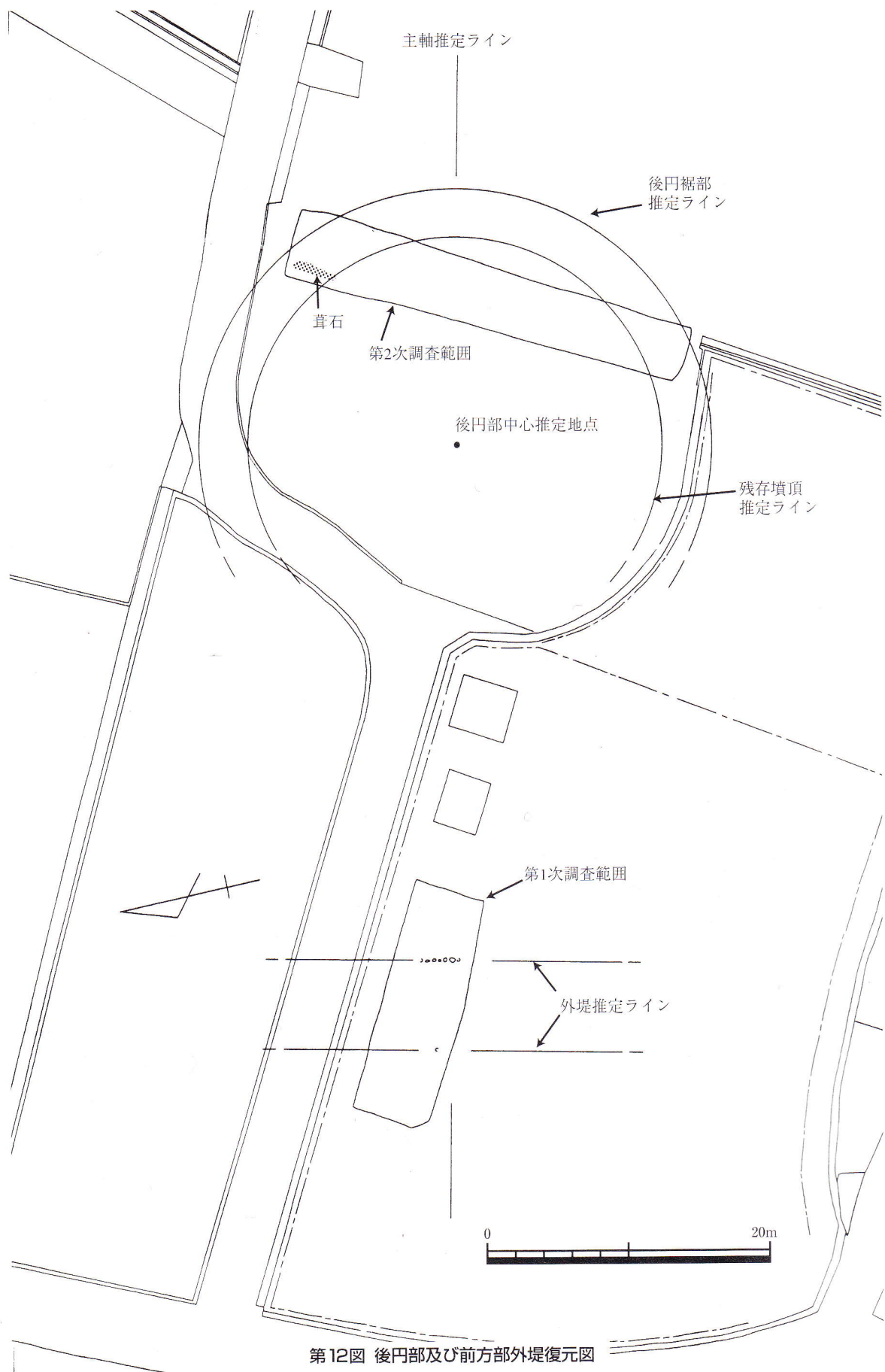
今回の調査において確認した成果は、これまで推定としてされていた後円部の規模を含め、墳丘の内部構造などを明らかにすることができた。このことから、第 1 次調査の成果をもとにある程度の復元が可能となった。

まず今回の調査から後円部の大きさを復元すると、調査区の南北両端で検出した残存する墳頂部のカーブから後円部の中心推定地点を設け、この点から残存部に半径を求め円を描いた。また、北側において検出した周濠の基底部に半径を求め、推定後円径を割り出した。その結果、削平を受けた後円頂部で直径推定 29m、基底部の後円径推定 36m であることが判明した。残存する後円高は 1.7m (標高約 4.2m) を測り、基底部 (標高約 2.5m) からの墳丘斜面傾斜角度は、南北両端の立ち上がりから両者とも約 27° の角度が得られている。

次に、第 1 次調査の成果を踏まえ前方後円墳として全体を考察すると、第 1 次調査で検出された外堤の両端に樹立されたとみられる埴輪列より、その方向は磁北より $N-13^{\circ}-E$ となり、後円部の中心推定地点より垂線を下ろした場合、古墳の主軸は磁北より $N-77^{\circ}-W$ となる。この主軸の方向は、近接する車駕之古址古墳とほぼ同じ方向性をもつ。

墳形は車駕之古址古墳を例に取り上げてみると、後円部径約 51m に対し、前方部長約 41m であり、この比率は 1 : 0.8 となる。この比率を本古墳に当てはめると前方部長は約 29m となり、第 1 次調査の埴輪列を外堤とした場合、全く周濠が存在しないこととなる。このことから、本古墳は前方後円墳でも前方部長がかなり短い帆立貝式古墳である可能性が強まった。しかし、今回の調査で得られた北側周濠から基底部の標高が約 2.5m であるのに対し、第 1 次調査の外堤高が約 2.6m となり、比高差が 10 cm 程度であるのが疑問の残るところである。

次に古墳の内部構造は、まず標高約 2.2m にほぼ水平堆積する 12 層 (茶灰色砂) がベース面とみられるが、その直上に約 30cm の厚みで堆積している 11 層 (黒色粘土) が古墳の構築時に運ばれてきたものかについては遺物等が検出できず不明確である。また、その上層にいたっても粘質と砂質の互層になり、遺物は出土していない。このことから、本古墳は海岸の砂丘において自然に形成された砂堆上に構築された古墳の可能性が残る。また、近接する車駕之古址古墳においても同様に黒色粘土層が確認され



第12図 後円部及び前方部外堤復元図

ており、今後の調査においてこの粘土層の広がり注目される場所である。

出土遺物は、その大半が古墳に樹立されていたとみられる埴輪片である。埴輪は、第1次調査で出土したわずかな形象埴輪以外は、円筒埴輪、朝顔形埴輪である。その埴輪の形状は先に触れたが、同古墳群に存在する他の二基の古墳(釜山古墳・車駕之古墳)と酷似するものである。しかし、本古墳の特徴的な埴輪としては、第1次調査で出土した全体を推定復元できる7突帯8段の大型円筒埴輪が1点ある。今回の調査で出土した埴輪では、ほかの二基の古墳に比べタタキ調整を明確に残すものが多く、比較的タガ幅の狭い円筒埴輪が一定量含まれているとみられる。またタガの高さは、1.0cmをこえる比較的高いものも多く出土している。

次に、本古墳の築造時期は、現状では明確にできないが出土した円筒埴輪より川西宏幸氏のⅣ期に併行するものとみられ、5世紀中頃から後半期の年代が考えられる。また埴輪の形状は、タガの突出やタタキ技法が比較的多くみられることから車駕之古墳に比べ古い要素を示し、また大阪府岬町の西陵古墳の埴輪に近いものである。車駕之古墳がこれまでの調査において、5世紀第3四半期を前後する頃の築造とみられ、また西陵古墳が5世紀第2四半期頃とみられていることより、茶臼山古墳は両古墳の狭間に構築されたものと考えられる。

最後に、本古墳は県下では平野部にわずかに築かれた重要な中期古墳の一つである。これまでの調査において少しずつ全容が明らかとなりつつあるが、まだ全体を復元するに至っていない。今後、当古墳の保存のためにも正確な範囲確認が急がれるところである。

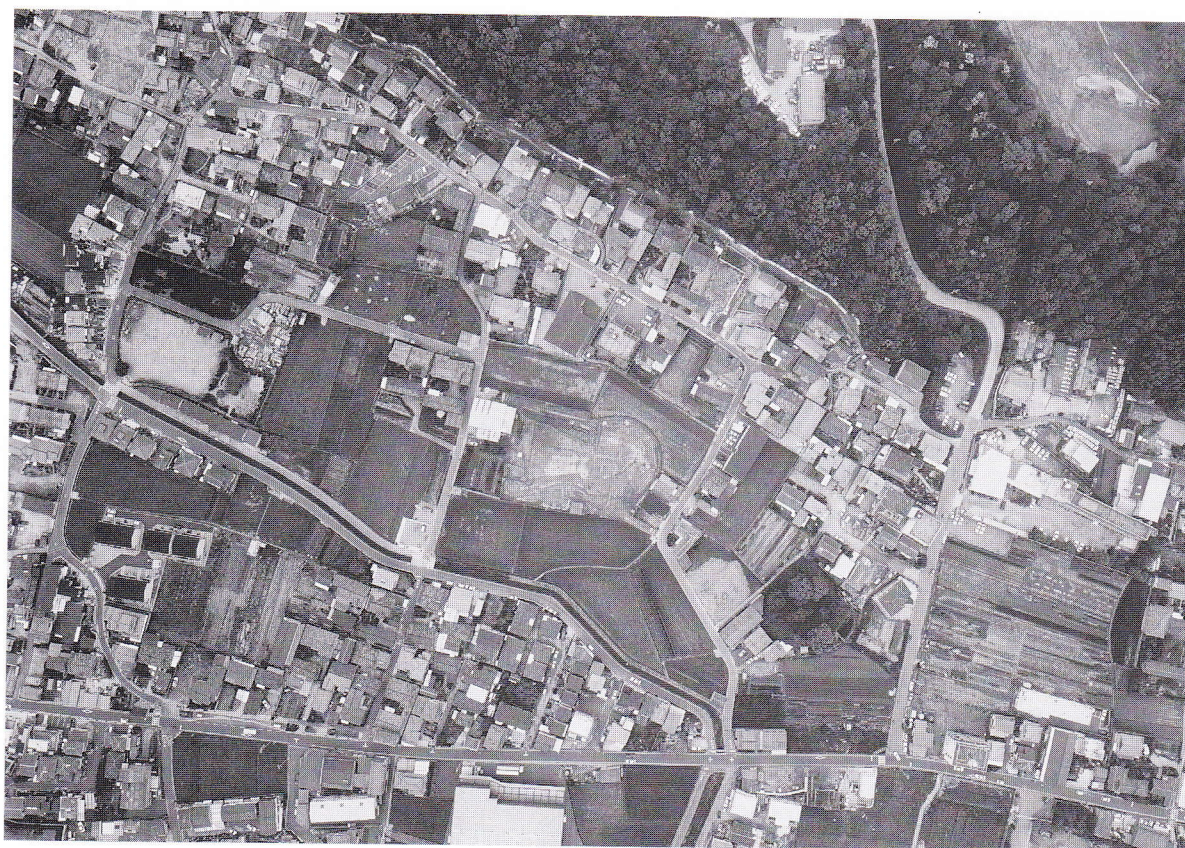
【参考文献】

- 『木ノ本釜山(木ノ本Ⅲ)遺跡発掘調査報告書』 同志社大学考古学研究室・和歌山市教育委員会 1989
- 川西宏幸 「円筒埴輪総論」 『考古学雑誌』 64-2 1978
- 近藤義郎編 『前方後円墳集成 近畿編』 山川出版社 1992
- 『車駕之古墳発掘調査概報』 和歌山市教育委員会 1993
- 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報1』 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 1992
- 『車駕之古墳範囲確認調査概報』 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 1994
- 西山要一 『淡輪磯山古墳群』 磯山古墳群調査会 摂河泉文庫 1980

報 告 書 抄 録

ふ り が な		わかやましないいせきはつくつちょうさがいほう						
書 名		和歌山市内遺跡発掘調査概報						
副 書 名		平成7年度						
巻 次								
シ リ ー ズ 名								
シ リ ー ズ 番 号								
編 著 者 名		井馬好英						
編 集 機 関		財団法人 和歌山市文化体育振興事業団						
所 在 地		〒640 和歌山県和歌山市西汀丁29 TEL 0734－32－0012						
調 査 主 体		和歌山市教育委員会						
所 在 地		〒640 和歌山県和歌山市七番丁23 TEL 0734－32－0001						
発 行 年 月 日		西暦 1996年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ちやうすやまこふん 茶白山古墳	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 きのもと 木ノ本	3020150	44－3	34° 15′ 36″	135° 08′ 07″	19951024 19951122	123	石垣改修
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物			特 記 事 項	
茶白山古墳	古 墳	古 墳 時 代	古墳の墳丘	埴輪、須恵器、 土師器、瓦器、 輸入陶磁器、ガラス玉			古墳の葺石	

圖 版



調査地周辺空撮（上が北） 車駕之古址古墳第2次調査時



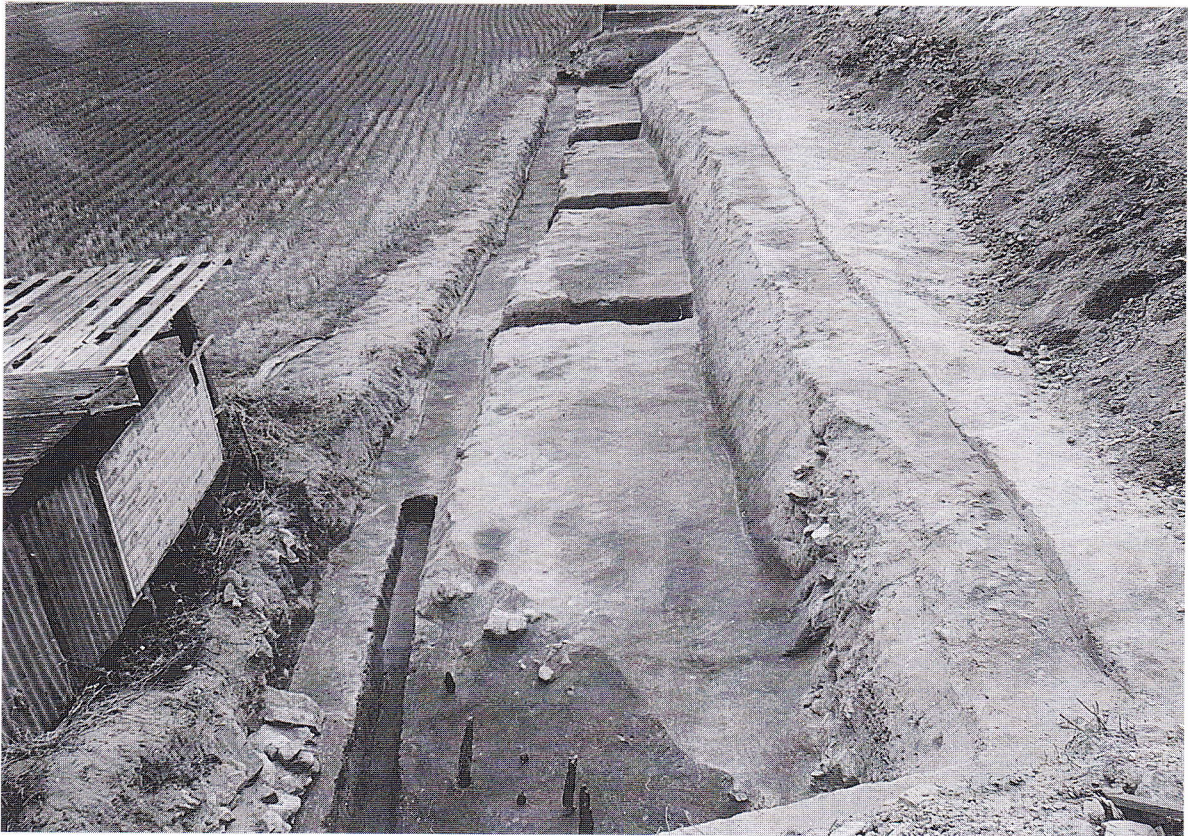
調査地遠景（北東から）



調査地遠景（東から）



調査前（南から）



全景（北から）



全景（南から）



北側墳丘斜面（北から）



南側墳丘斜面（東から）



北側墳丘斜面葺石（北東から）



北側墳丘斜面葺石（真上から）



北側墳丘斜面遺物出土状況（東から）



北側墳丘裾部杭列（南東から）



調査地北壁土層堆積状況（南から）



北側墳丘西壁土層堆積状況（東から）



トレンチ 1 西壁土層堆積状況（東から）



トレンチ 2 西壁土層堆積状況（東から）



トレンチ3 南壁土層堆積状況（北から）



トレンチ4 西壁土層堆積状況（東から）



1a 円筒埴輪（上部）



1b 円筒埴輪（底部）



6 円筒埴輪



2 円筒埴輪



3 円筒埴輪



4 円筒埴輪



5 円筒埴輪



7 円筒埴輪



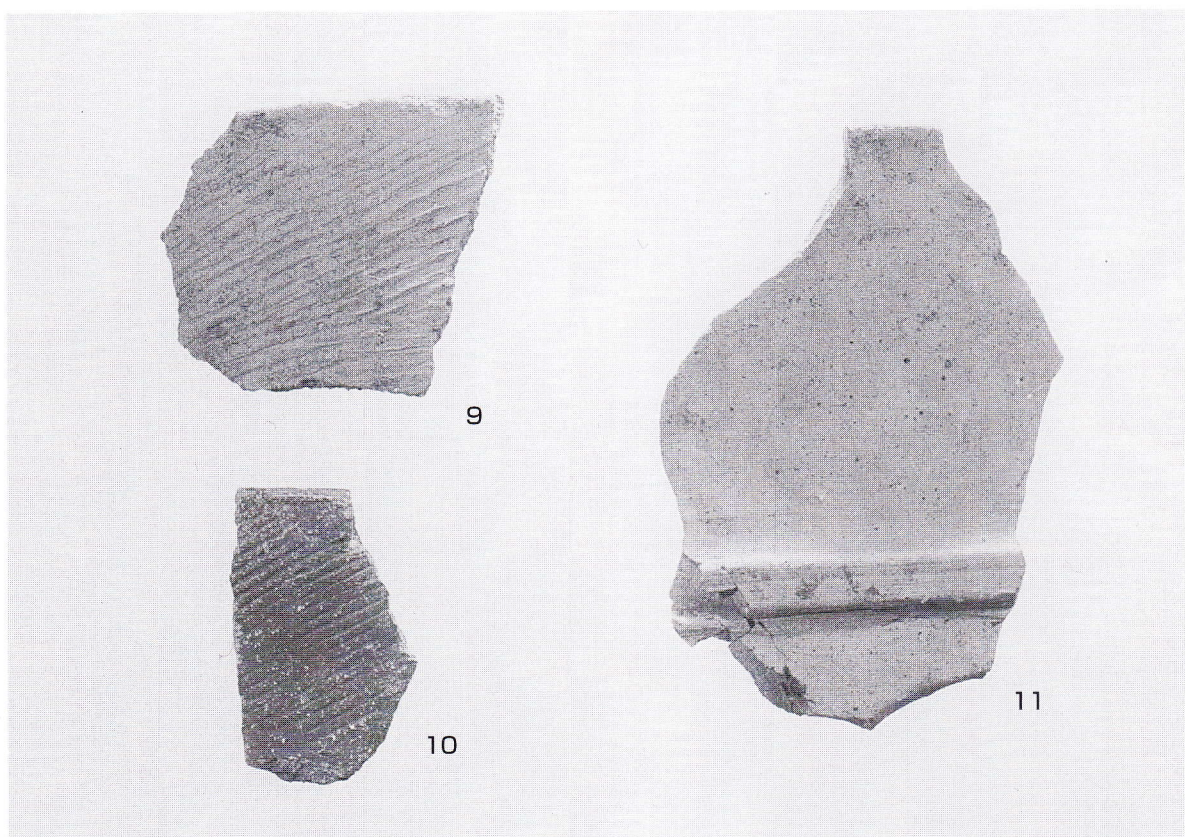
8 円筒埴輪



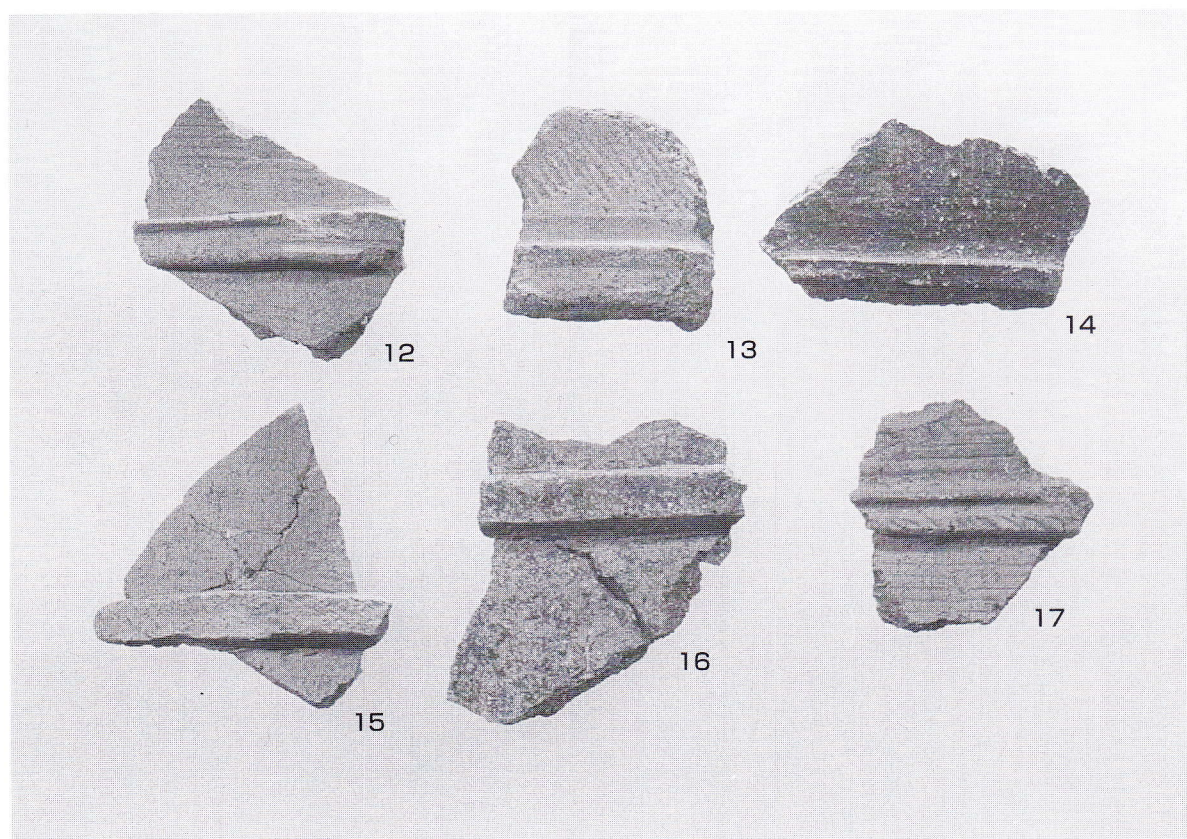
a 円筒埴輪(口縁部)



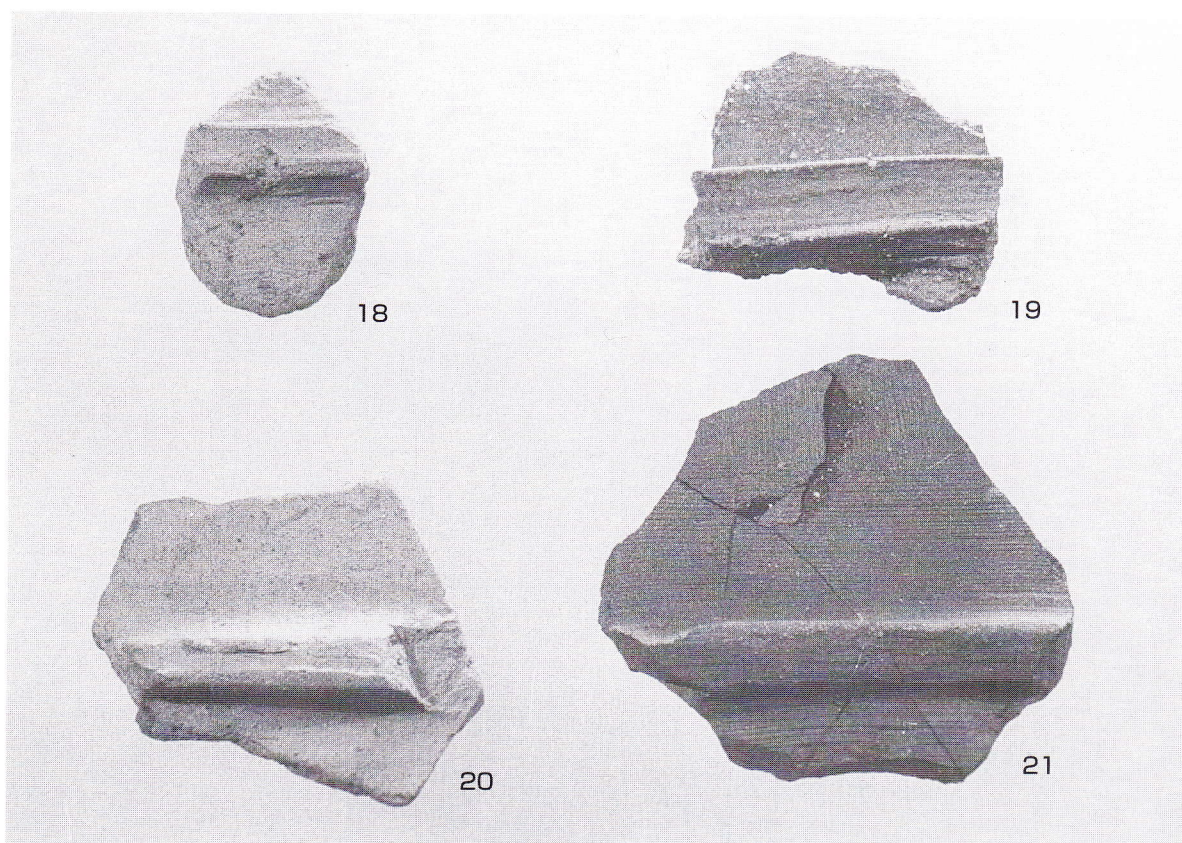
b 蓋形埴輪



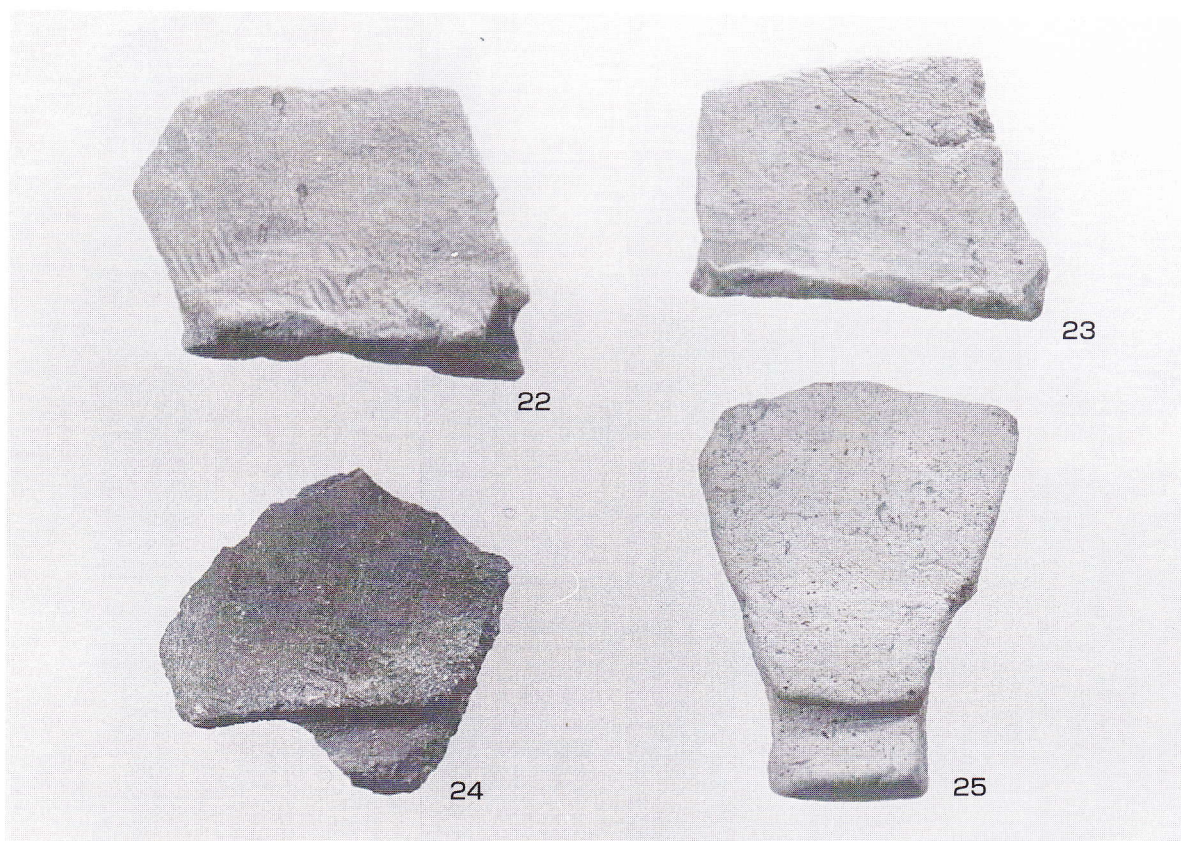
9～11 円筒埴輪（口縁部）



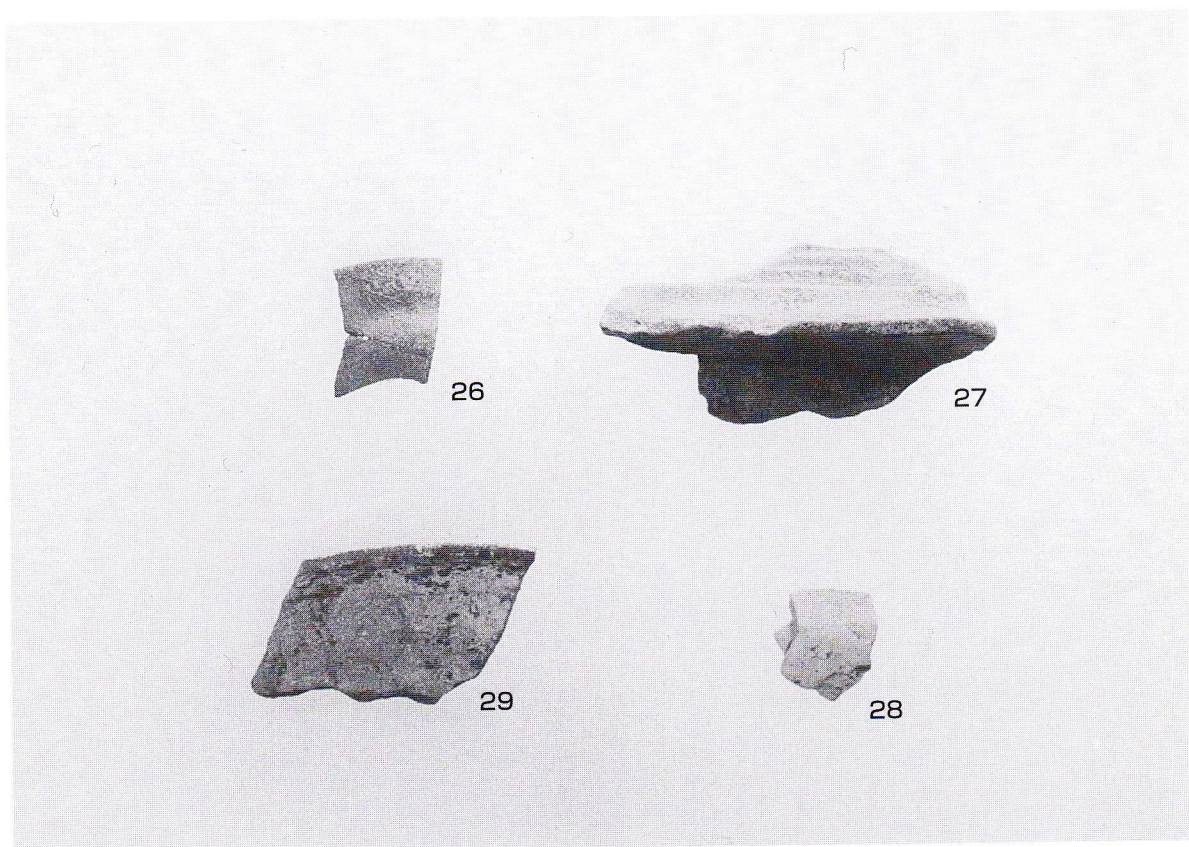
12～17 円筒埴輪（胴部）



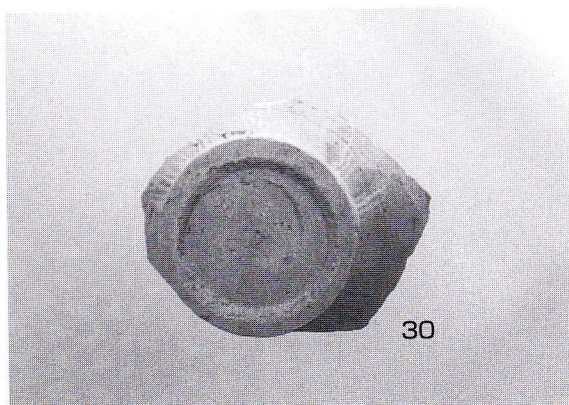
18～21 円筒埴輪 (胴部)



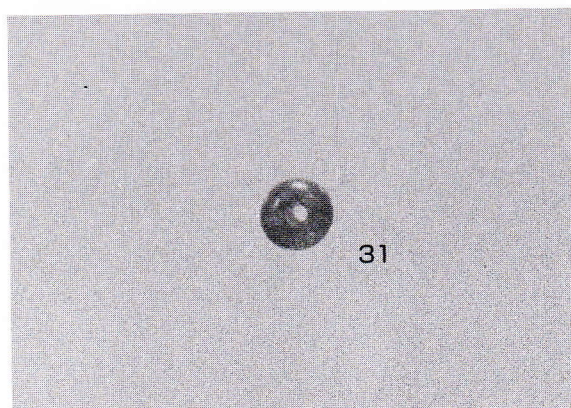
22～25 円筒埴輪 (底部)



26 須恵器高杯 27 土師器羽釜 28 土師器皿 29 東播系須恵器こね鉢



30 中国製白磁碗



31 ガラス小玉



a、b 木製杭

平成8年3月31日発行

和歌山市内遺跡発掘調査概報

— 平成7年度 —

編集 (財)和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29

発行 和歌山市教育委員会

和歌山市七番丁23

印刷 株式会社 高木プリント

© 和歌山市教育委員会 1996